

街の 灯り 物語

灯り——それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

バ

ブル崩壊後の一九九四年に、会社を
起こした。十五歳足らずの貸オフィ
スで毎日ヘトヘトになるまで働き、会
社を出るのはいつも深夜。でも周囲のビルを見
上げると、煌々と照明がとる窓が幾つもある。
まだ仕事をしている人がいる！ 家路について
マンションの窓にも幾つもの灯りが見える。灯
りのともった窓の一つひとつに誰かがいる。こ
んな夜中に、まだこんなにたくさんの方が、笑っ
たり泣いたり悩んだりしながら、一生懸命生き
ている——そう思うと、自分の苦勞がちっぽけ
なことに感じられ、明日もまた頑張ろうと力が
湧いてきた。

灯りの数だけ人の営みがある。灯りを見るた
びそう思う私には、一つの原因風景がある。春日
大社の夏の万燈籠。八月のお盆の日、境内に夕
闇が迫る頃、約三千基の燈籠が点灯され、参道
から本殿まで灯りが連なる。時代も意匠もさま
ざまな燈籠は、人々が商売繁盛や家内安全、五
穀豊穡を祈願して奉納したもの。一つひとつの
灯りに、一つひとつの思いが込められている。
奈良で育った私にとって、この幻想的な光景は
幼心にしっかりと焼き付いている。

そしてもう一つ、神様をお願いをしていた私
への母の言葉。「お願いなんてしないで、誓い
なさい」。神社は神頼みの場ではなく、「私はこ
うなりたい、だからこれを頑張ります」と誓う
場だというのだ。そう考えると、万燈籠の灯り
も、「一生懸命生きていきます」という誓いの
象徴という気がする。

万燈籠は平安の昔から八百年の間、人の営
みを映し出し、灯りをともし続けている。奈良
にはこのように「時間のテスト」にパスして数
百年、千年と残ってきたものが多い。だから私
が起こした会社も、時代は変化してもその時々
の社会に必要とされる仕事をやり続けていくこ
とで、少なくとも三百年は続く会社になりたい。

一人ひとりの時間には限りがあるが、未来に
向けて思いや志をつないでいく。やがて私が次
の人へバトンを託すとき、少しでも良いバトン
を渡せるよう、苦しくてもハードルを下げず精
一杯頑張っていこう——今夜もオフィス街の灯
りを見上げ、誓いを新たにしている。 羅

現代の万燈籠、 オフィス街の灯りに誓う 秋山咲恵

サキコーポレーション代表取締役社長



あきやま さきえ

サキコーポレーション代表取締役社長

1962年大阪府生まれ、奈良県出身。京都大
学法学部卒。アンダーセン・コンサルティング(現
アクセンチュア)を経て、94年、技術系ベンチ
ャー「サキコーポレーション」を起業。電子機
器のプリント基板検査装置で世界第2位のシ
ェアを獲得。政府税制調査会、中小企業政
策審議会、国土審議会政策部会など委員歴
任。日経 WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー
2006」など受賞。

<http://www.sakicorp.com/jp/index.html>

街の
灯り
物語